椙山女学園大学教育学部紀要（*Journal of the School of Education, Sugiyama Jogakuen University*）**16**（1）：67–76（2023）

原著論文（***Article***）

特別活動における生徒の「主体性」がもたらす「充実度」への影響
── 自己評価による振り返り活動に着目して ──
Influence of “student initiative” in extracurricular activities on “fulfillment”: Focusing on self-evaluation reflection activities

村瀬　悟*
MURASE Satoru*

要　　旨

特別活動の自己評価による振り返りアンケートを元に，長期的かつ包括的な（特別活動内での比較を含む）視点から，生徒の主体性と充実度との関連性について明らかにすることを試みた。その結果，①【学級活動】【生徒会活動】【学校行事】いずれの活動内容においても生徒の主体性がそれぞれの活動の充実度に対して影響を及ぼしていること，特に学級役員や生徒会役員・委員長，学校行事の実行委員会など立候補して役割を担っている生徒ほど，役割のない生徒に比べその影響が大きくなっていること。②【学級活動】【生徒会活動】【学校行事】いずれも共通してその主体性と充実度とが影響し合っている一方で，例えば【学級活動】では学級の充実度を振り返りの視点として重視しているなど，それぞれ異なった特性を持っている可能性が示唆されたこと等を明らかにすることができた。

キーワード：特別活動，自己評価，振り返り活動，主体性，充実度
Key words：extracurricular activities, self-evaluation, review activities, student initiative, fulfillment

1. 研究の背景と目的

充実した学校生活を目指すために，実に様々な教育活動が行われてきている。その指標を示す方法（例えばQ-U（学級満足度尺度等）[1]など）や学校生活の安全性（生徒指導提要をはじめとする）を高めるための視点は多い。特別活動は教育課程の領域の一つとして，教科外の学校生活全般を担う教育活動を展開するため，学校生活を充実させるためには決して欠かすことのできない重要な領域である。つまり，特別活動を充実させることは，生徒一人一人の学校生活を充実させるために欠かすことのできない重要な役割を担っているのである。

また，平成29年度告示の学習指導要領では，特別活動の目標「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ，様々な集団活動に自主的，実践的に取り組み……」（下線は筆者による）とあるように，生徒自らの行動を基盤とし，社会の形成者の育成を目標としている。学校を一つの社会として捉え，その学校を自分たちの手で形成する活動が，将来社会を形成する力を育む。そこでは特別活動の行動原理「為すことによって学ぶ」姿勢が鍵となる。自分たちの手で，自ら進んで「主体的に」行動することで，自分たちの生活をより良くしていく活動が求められているのである。

一方で，これらの「学校生活の充実」と「生徒の主体性」について，特別活動に関連して主に以下のような先行研究が挙げられている。まず，学校生活の充実度に関して，伊藤らは小学校児童における「生きる力」は「学校生活満足度」の各教科等と特別活動に強い因果的影響力を及ぼす構造であることを明らかにし，生きる力と特別活動との関連性を指摘している[2]。樽木靖夫，蘭千壽は中学校の学校行事の視点から体育祭・文化祭などの行事活動の成就感が生徒の自主性とともに他者理解に関する自己評価が影響し，ある行事活動が成就感を高める体験ができるとその後の活動，ひいては学校生活にも肯定的な影響が連続的に作用することも推測できるであろう，と記されている[3]。

生徒の主体性に関しては，学級活動において，髙栁は小グループによる話し合い活動を日常的に取り入ることで主体性をもって話し合いに参加する集団の育み，学級生活の満足度（Q-U 調査結果に基づく）を向上させた実践報告を行っている[4]。大林，近藤は中学校の生徒会活動に着目し，教師が生徒による変革を目的としたサービス・ラーニングを促すことが生徒の主体性と社会的有効性意識の向上に影響を与えていることを，防災をテーマにした授業前後の生徒会役員 6 名のアンケート結果から明らかにしている[5]。部活動において，長谷川は運動部活動を通じた生徒の人間関係形成能力の育成

* みよし市立三好中学校教諭／椙山女学園大学教育学部非常勤講師
2022年11月 8 日受付

に関して，とくに主体性と協働性に着目し，部活動，特別活動を問わず，これらの活動においては，周囲と協力しながら物事に取り組む力とされる協働性を養う場となっていることが両者の共通性であり，主体性については部活動を否定的に捉える者に対する質的調査からは，教師，生徒間の強い主従関係の中で，強制された自主性の元で形成されたものであると示している[6)]。

このように「学校生活の充実」と「生徒の自主性」に関する研究は数多く報告されているが，特定の行事や授業など実践の効果の検証が多く，複数の活動を包括した，いわば学校生活の一部としての特別活動の効果を捉えた事例や，同一集団での特別活動の各活動内容（学級活動・学校行事・生徒会活動）が生徒の主体性と学校生活の充実との間にどのような影響を及ぼしているのかについての事例は管見の限り少ない。

特別活動は社会を形成する人材を育成する教育活動である。社会とはすなわち社会生活とも言える。生徒の視点に立つと，社会生活≒自分たちの学校生活がいかに充実していくのかは，一つの活動によってもたらされるものではないことに気づく。例えば体育祭や修学旅行など，たとえ心に残る活動があったとしてもそれだけで学校生活が充実しているとは言えないだろう。充実した学校生活とはつまり，一つ一つの活動の積み重ねの連続性であり，それらを包括した結果,「充実していた」と感じるものであると考える。一つの教育活動がどのような教育効果をもたらすか，今後も研究を重ねることは重要であるが，生徒の視点に立った，子どもたちの学校生活の中での主体性と充実感を捉えることも重要であると考える。

そこで本研究では，特別活動を学校教育の中核として取り組んでいるA中学校を対象とし，平成25年度（以下H25と記載する）から継続して行われている特別活動の自己評価による振り返りアンケートを元に，特別活動の視点から生徒の主体性と充実度との関連性について明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1. 調査対象校について

A中学校は愛知県の郊外にある古くからの住宅地にある生徒数約550人の中規模校で，生徒は比較的落ち着いている学校である。

A中学校は生徒会活動において，生徒の主体性を重視した生徒議会制度を設けて学校内外に活動を展開し，学校行事の運営には有志を募って実行委員会が組織されて活動を行っている学校である[7,8)]。また，校内研究においては学級活動を研究の柱に位置づけた実践が行われた経緯（H30～R3）もある，いわば特別活動推進校と位置づけることができる。

また，特別活動を効果的に進めるにあたり，前期・後期末に各1回ずつ，生徒の自己評価（振り返りアンケートとも呼んでいる）を実施し，結果をもとに各活動の効果を確かめる機会にしている。

2.2. 調査方法

本研究はA中学校のH25～R3の特別活動（学級活動，学校行事，生徒会活動）の振り返り（自己評価）アンケート結果を調査対象とした。表1に調査対象者の一覧を示す。学級活動及び生徒会活動は前後期1回ずつ，学校行事については

表1　各活動内容の調査対象者数（人）

学級活動

		1年	2年	3年	合計
H25	前期	172	181	158	511
	後期	144	171	132	447
H26	前期	167	171	176	514
	後期	154	170	166	490
H27	前期	159	136	170	465
	後期	139	150	172	461
H28	前期				
	後期	178	150	162	490
H29	前期				
	後期				
H30	前期				
	後期	133	140	145	418
R01	前期	173	129	146	448
	後期				
R02	前期				
	後期	187	177	147	511
R03	前期	161	180	180	521
	後期	157	163	117	437
計	前期	832	797	830	2459
	後期	1092	1121	1041	3254
	計	1924	1918	1871	5713

生徒会活動

		1年	2年	3年	合計
H25	前期	117	101	104	322
	後期	95	97	86	278
H26	前期	86	96	101	283
	後期	98	99	86	283
H27	前期	92	93	102	287
	後期	106	94	86	286
H28	前期				
	後期	103	105	73	281
H29	前期				
	後期				
H30	前期				
	後期	89	90	92	271
R01	前期	103	89	93	285
	後期				
R02	前期				
	後期	90	100	66	256
R03	前期	86	96	101	283
	後期	102	119	97	318
計	前期	484	475	501	1460
	後期	580	599	513	1692
	計	1064	1074	1014	3152

学校行事

	1年	2年	3年	合計
H25	172	171	131	474
H26	157	163	173	493
H27	146	147	171	464
H28	181	151	163	495
H29				
H30	137	142	145	424
R1				
R2	188	183	148	519
R3	156	149	148	453
計	1137	1106	1079	3322

表2　各活動内容のアンケート項目

学級活動

No.	内容	分類
1	**学級での係活動などの仕事を，自ら進んで行うことができましたか。**	**主体性**
2	当番（給食・清掃・日直）の仕事を，責任をもって果たすことができましたか。	
3	学級での活動時など，自分勝手な行動をとらずみんなと協力して活動することができましたか。	
4	学級でのきまり（ルール）を，守れましたか。	
5	**より良い学級にするために，活動内容を工夫したり，呼びかけたりできましたか。**	**主体性**
6	**学級での活動に，学級（友だちなど）の意見を取り入れるように努力しましたか。**	**主体性**
7	学級活動は充実していましたか。	充実度
8	学級活動を（やりがいをもって）楽しむことができましたか。	充実度
9	学級活動を通して，日々の学校生活が良くなりましたか。	充実度

生徒会活動

No.	内容	分類
1	委員会活動は充実していましたか。	充実度
2	委員会活動を（やりがいをもって）楽しむことができましたか。	充実度
3	委員会で，自分の役割を，責任をもって果たすことができましたか。	
4	委員会の活動に，自分から進んで参加できましたか。	主体性
5	**委員会の活動に，学級（友だちなど）の意見を取り入れるように努力しましたか。**	**主体性**
6	**所属する学級での委員会活動は充実しましたか。**	**充実度**
7	委員会活動を通して学校生活が良くなりましたか。	充実度
8	**委員会活動はみんなのためになった（貢献できた）と思いますか。**	

学校行事

No.	内容	分類
1	**各学校行事に，自分から進んで参加できましたか。**	**主体性**
2	**各学校行事に向けての準備活動(話し合い・作業等)に，積極的に参加できましたか。**	**主体性**
3	**各学校行事をより良くするために，活動内容を工夫したり，呼びかけたりできましたか。**	**主体性**
4	各学校行事で，自分の役割を，責任をもって果たすことができましたか。	
5	各学校行事は充実していましたか。	充実度
6	各学校行事を（やりがいをもって）楽しむことができましたか。	充実度
7	各学校行事を通して，学校生活が良くなりましたか。	充実度

学校行事の実行委員会経験

No.	内容
1	体育祭
2	文化祭
3	3年生を送る会
4	中学校説明会

年度末に1回実施している。委員会活動の回答者は前後期それぞれの委員会委員に該当する生徒のみである。なお，記入ミスや入力漏れ等の欠損値は除外している。また，表中H29（平成29年度）のようにA中学校の都合によりアンケートを実施していない時期もある。

次に，調査項目について以下に示す（表2）。これらの項目は，例えば「学級での係活動などの仕事を，自ら進んで行うことができましたか」等，生徒の各活動の視点に立ち，生徒自身が自分の活動を振り返るためにA中学校で作成されたものである。これらの項目を4件法で回答し，最後に記述による振り返りを記入して完了となる（R3以降，タブレットによる入力方法になった）。近年教科・領域ともに振り返り活動が推進していることもあり，こうした生徒の負担を少なくした活動が特別活動の継続性を支えている。

このように，学級活動・生徒会活動・学校行事（※部活動についても実施しているのだが，H29学習指導要領の活動内容に注視するため，今回は割愛させていただく）など活動内容ごとにそれぞれの項目で振り返りを行っているのだが，これらの項目には，それぞれ共通して生徒の充実感に関する項目（「学級活動は充実していましたか」など）と，生徒の主体性に関する項目（「委員会の活動に，自ら進んで参加できましたか」など）が適時設問されている。分類として表2に記載する。

3. 結果と考察

3.1. 各活動内容のアンケート結果による比較

各活動内容のアンケート結果を図1に示す。なお，図中項目名は紙面の都合により簡略化している。「とても思う」に着目してそれぞれの回答を比較する。

まず，主体性に関連する項目では，学級活動「5．より良くするための工夫」が他に比べて低い傾向にある（20.4%）。学校行事「3．より良くするための工夫」も同様に他に比べて低い（24.7%）。いずれの活動内容においても，生徒にとって「工夫」は創造性が問われていること，「呼びかけ」のように主体的な行動についての質問であることが推測される。主体性に関する項目「○○を（自ら）進んで行うことができましたか」の回答については，学校行事の回答がやや高く

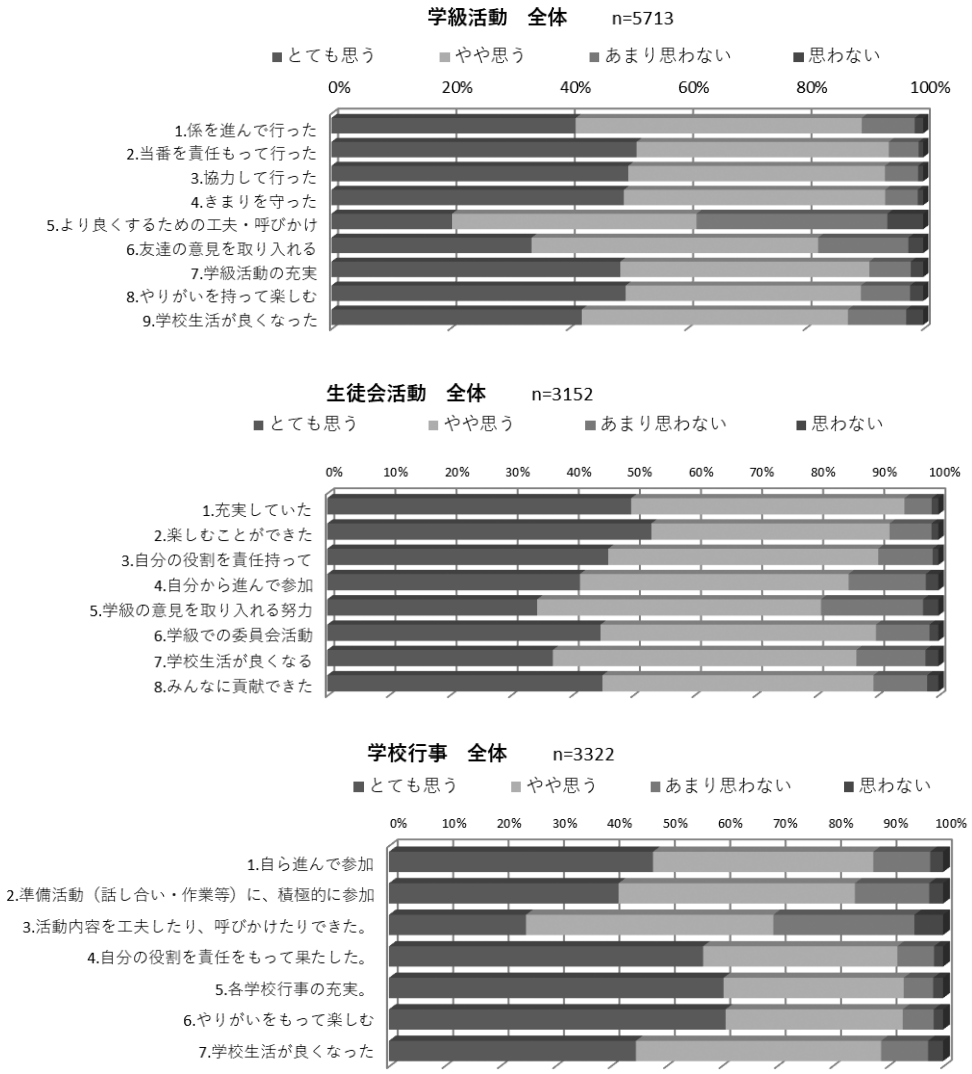

図 1　各活動内容のアンケート結果

(47.6%), 学級活動（41.3%), 生徒会活動（41.3%）であった。

次に，充実度に関する項目では，それぞれの活動内容の充実に関する項目「〇〇は充実していましたか」の回答は学校行事（60.4%）が最も高く，学級活動（48.8%）生徒会活動（49.7%）となった。また，それぞれの活動が学校生活の改善につながっているかを質問している項目「学校生活が良くなりましたか」の回答はいずれも40%前後が「とても思う」と回答しており，学校行事（44.6%）学級活動（42.3%）生徒会活動（36.9%）の順に高い値となった。これは学校行事の充実度の高さと「学校生活が良くなりましたか」の傾向が一致していることがわかる。

3.2. 生徒の役割の違いによる影響

次に，生徒の役割の違いが振り返りにどのような影響があるのかを検討した。はじめにそれぞれの活動内容ごとの組織構成・役割等について説明する。対象者数の一覧を表 3 に示す。

学級活動の組織構成

学級内組織として，A 中学校では学級役員（級長・副級長（男女各 1 名），書記（男女各 1 名））→委員会委員→学級係の順に組織づくりを行っている。級長・副級長，書記の計 4 名が学級役員（通称：学級二役）として学級内選挙（立候補を原則とする）により選出されている。なお，級長・副級長は学年運営委員会（いわゆる学年リーダー会），書記は生活委員会を兼務し，生徒会組織の委員会活動として位置づけられて活動している。委員会委員は，各学級で前後期に全員が必ず委員会委員を担当することが決められており，生徒は必ず一度は生徒会活動へ参加している。これは希望者を優先しているものの，全ての委員会が希望者のみで決定しないことも多い。学級係については，各学年の裁量によるがほとんどの学級では生徒全員が何らかの係活動を担当しており，その種類は各教科係が約半数，その他に学級独自の係活動を構成して活動している。

表 3　役割・経験回数別対象者数

【学級活動】

	級長・副級長	書記	委員会委員	その他	合計
1 学年	116	119	739	950	1924
2 学年	120	115	714	969	1918
3 学年	118	134	598	1021	1871
合計	354	368	2051	2940	5713

【生徒会活動】

	生徒会役員	委員長	副委員長	学年代表	役割なし	合計	学年運営委員	生活委員
1 学年	6	8	14	80	1062	1170	117	110
2 学年	50	64	72	14	990	1190	117	105
3 学年	28	58	27	25	959	1097	116	104
合計	84	130	113	119	3011	3457	350	319

【学校行事】（単年度での参加経験）

	参加した実行委員会				経験回数					
	体育祭	文化祭	3 年生を送る会	中学校説明会	1 回	2 回	3 回	4 回	未経験	合計
1 学年	392	531	550	38	391	307	158	8	273	1137
2 学年	407	501	532	21	440	223	185	5	253	1106
3 学年	448	520	45	0	447	259	16	0	357	1079
合計	1247	1552	1127	59	1278	789	359	13	883	3322

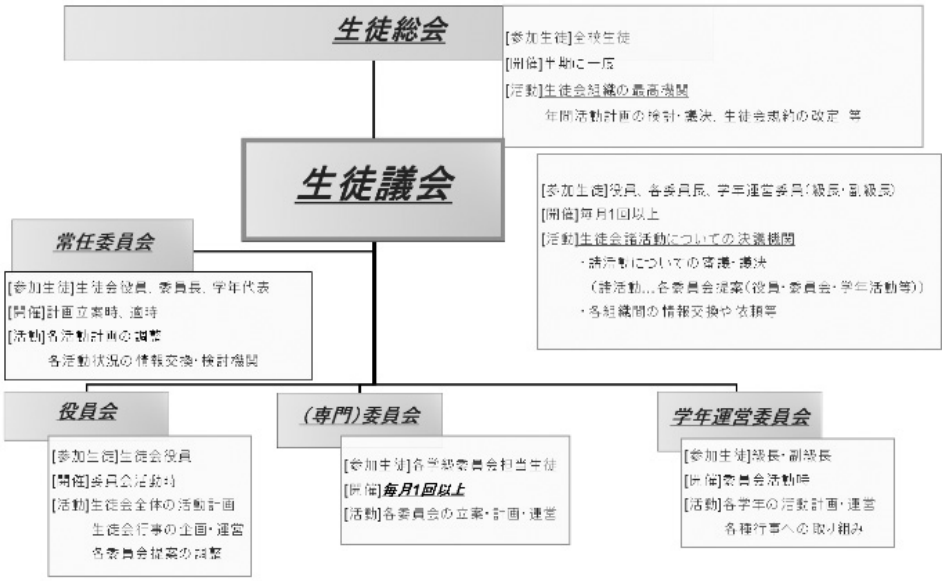

図 2　生徒会組織図

生徒会組織

生徒会組織は図 2 のように構成されており，生徒会役員は前後期ごとに立候補者の中から生徒会役員選挙で任命される。委員会は 9 つの専門委員会（生活，図書，給食など）と学年運営委員会（学年での活動・運営を担う）および役員会で構成されている。委員長は前期が 3 年生，後期が 2 年生の中から立候補者を募り，各期第 1 回目の委員会活動内にて委員長選挙を行い，任命される。副委員長も第 1 回目の委員会で任命されるが，実質的な活動は各委員会に委ねられているため，活動にばらつきが見られる。

学年運営委員会，生活委員会は前述の通り，学級役員として立候補・信任された生徒が自動的に兼任する形となっており，これらの委員会を希望して立候補する生徒も少なくない。委員会委員は各学級で指定された人数で構成されているが，

○○委員会へ入りたいという希望者もいる。また，毎月生徒議会が開催されており，参加者は生徒会役員・各委員長・各学年運営委員（議長・副議長含む）である。各委員会をはじめとするすべての生徒会活動の提案をこの生徒議会（年に2回の生徒総会の場もある）で審議され，可決承認されることで提案された活動が実施できるようになる。活動をより良いものに改善するため，また各学級での周知～実施を円滑に行うためにも全学級の級長・副級長が参加している。生徒議会の参加者はこうした緊張感と責任を感じて成長していることが伺える。

学校行事

A中学校では一般生徒の立候補を募って組織する実行委員会によって多くの活動を行っているが，その中でも全校生徒が参加する大規模な行事は体育祭（5月下旬），文化祭（10月下旬），3年生を送る会（2月下旬）である。これらの実行委員会はそれぞれ200名を超える大規模なものとなるため，生徒会役員が各行事の実行委員会を組織して，実施されてきた。（R4年度より実行委員会の組織作りの段階から全校生徒へ委ねられ，実行委員会が生徒会役員による運営ではなくなった。そのため，実行委員長も立候補によって決められる。）実行委員会への参加は原則自由であるため，すべての実行委員会（3回）に参加する生徒もいる。なお，R3年度は中学校説明会の実行委員会の様子も振り返りアンケート項目となっていたため，本調査にも参考として記載する。

3.2.1. 役割の違いによる生徒の「主体性」の比較

まず，役割の違いが「主体性」に関する項目にどのような違いが見られるかをクロス集計した。その結果を図3～5に示す。図中*はχ^2検定による有意差の認められた項目であり，【学級活動】では「その他」（【生徒会活動】では「役割なし」とそれぞれの役割に該当する項目との検定結果である。すべての結果において，役割のない生徒が最も回答が低く，役割のある生徒や実行委員会参加者の値が高いことがわかる。図3「自ら進んで参加した」では，学級活動，生徒会活動では特に委員長の回答が最も高く（83.1%），次いで生徒会役員（67.9%），級長・副級長（67.8%）となった。これは学級や委員会など組織を運営する役割の生徒である。学校行事では未経験が著しく低く（22.1%），回数を重ねるごとにおよそ20%ずつ増加していることがわかる。

図4「友達の意見を取り入れる」についても，全体の回答割合はやや低いものの，図3の傾向とほぼ同様の傾向となった。「友達の意見を取り入れる」は，他の項目に比べ低い値を示しているが，こうした役割があることで改善されることが推測される。図5「活動内容の工夫や呼びかけ」は，図4と同様に他項目と比べ最も低い項目の一つであるが，特に立候補をして参加する級長・副級長・実行委員会への参加者の値が高くなっている。

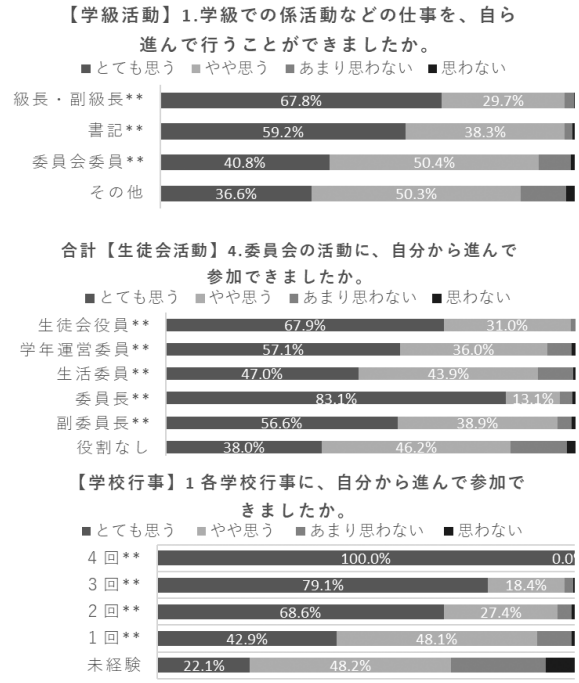

図3　役割×主体性「自ら進んで参加した」

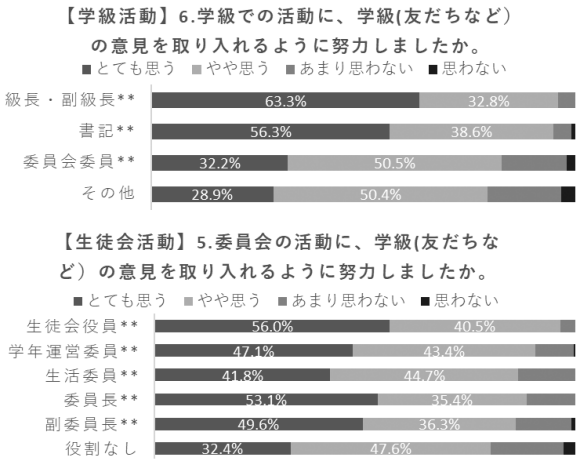

図4　役割×主体性「友達の意見を取り入れる」

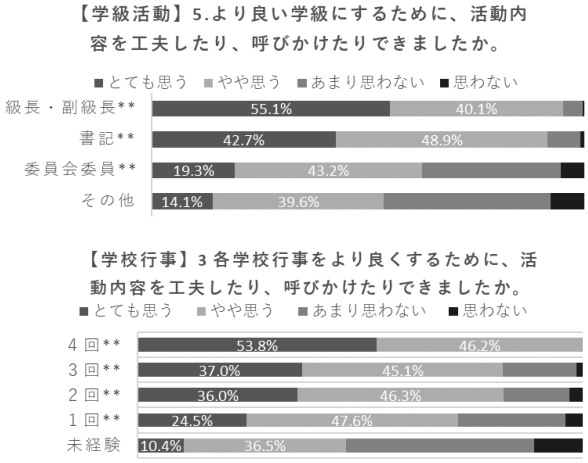

図5　役割×主体性「活動内容の工夫や呼びかけ」

以上の結果から，すべての活動内容において，それぞれの役割を担っている生徒の方が役割のない生徒に比べて「主体性」に関する自己評価が高くなることがわかる。また，これらの傾向は，活動内容に関わらず，同様の傾向を示しており，中でも学校行事では実行委員会の参加回数の増加に伴って高くなる傾向になっていることがわかる。

3.2.2. 役割の違いによる生徒の「充実度」の比較

次に，役割の違いが「充実度」に関する項目にどのような違いが見られるかをクロス集計した。その結果を図６～８に示す。図３～５と同様に，すべての結果において役割のない生徒が最も回答が低く，役割のある生徒や実行委員会参加者の値が高いことがわかる。

図６「(各活動は）充実していましたか」の項目では，すべての活動内容において役割のない生徒の値が40～50％であるのに対して，学校行事の経験回数（２回経験でも70％以上），生徒会活動の役割経験者の値（委員長，学年運営委員いずれも63％以上）が学級活動の二役（級長・副級長・書記）の値（59.5～62.7％）を上回っている。特に学校行事の経験回数が他に比べて高い。学校行事は係活動や委員会などに比べて，開催日に向けた準備～当日の大きな活動がはっきりと目に見えるため，成果や手応えを感じやすい特徴があることが影響していることが考えられる。

図７「(やりがいをもって）楽しむ」では，ほぼすべての項目で役割のある生徒の方が高い値を示しており，役割をもって活動することでやりがいや楽しさを感じられていることがわかる。一方で，委員会委員では有意差は見られるものの，他の項目に比べて低い値となっている。委員会の組織づくりが教育的配慮として全員が一度は参画するという強制力が働いていることが影響していると推察される。図８「各活動を通して，日々の学校生活が良くなりましたか」については，図７，８とは異なり，各活動が日々の学校生活に良い効果が見られるかを問う項目である。そういった視点からみると，図７，８の結果に比べて低い傾向にあることがわかる。

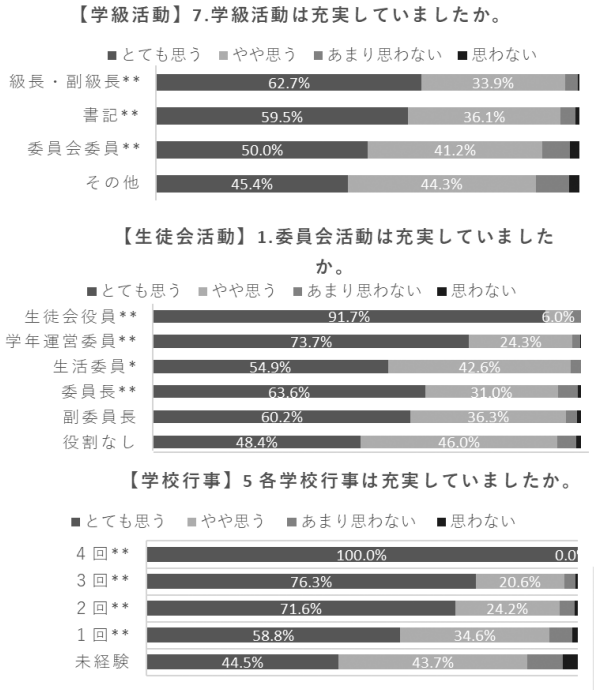

図６　役割×充実度「各活動は充実していた」

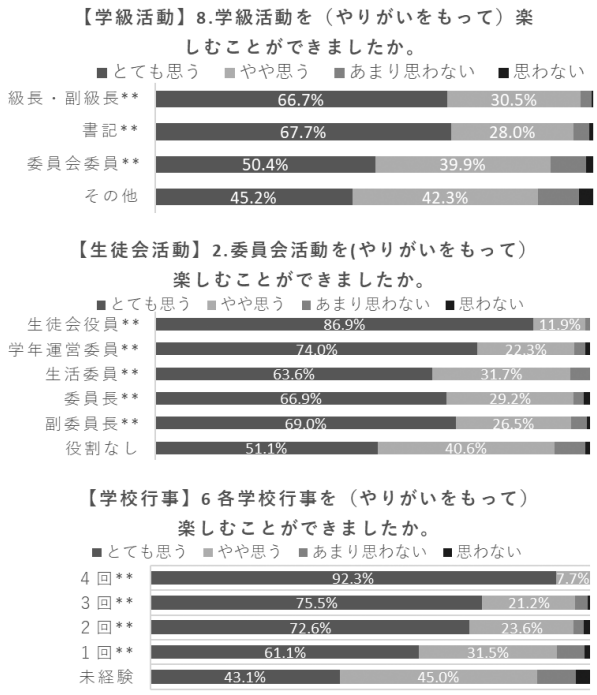

図７　役割×充実度「やりがいをもって楽しむ」

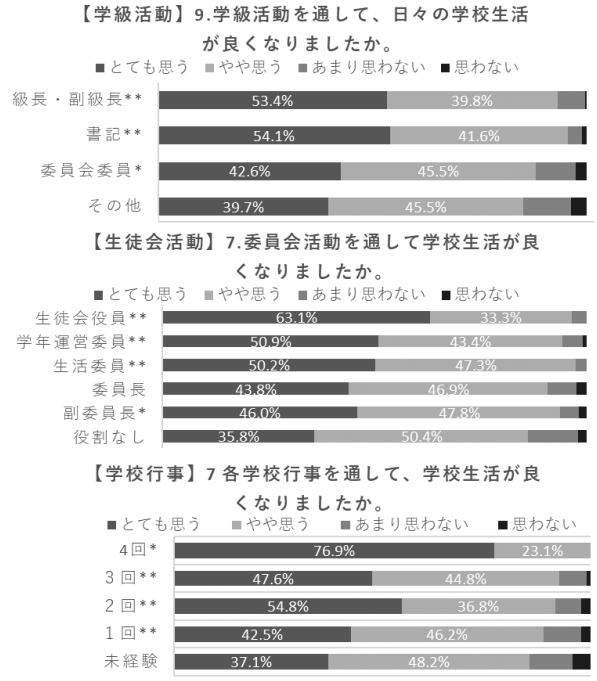

図８　役割×充実度「学校生活が良くなった」

学校生活が特別活動のみならず，学習面や先生や仲間との人間関係，部活動など広範囲にわたっているためだと考えられる。それでも特に値の高い実行委員会の4回経験者をはじめ，生徒会役員や級長・副級長，書記の生徒にとって，学校生活の意識に占める割合が特に高く，やりがいをもって取り組んでいると考えることができる。いずれにせよ，これらの特別活動での取り組みが学校生活に良い影響を及ぼし，その役割に参加することによってさらに高まっていることがわかる。

以上のことから，すべての活動内容において役割を担っている生徒の方が，役割のない生徒に比べて「充実度」に関する項目の回答が高いことが明らかとなった。さらに，学級書記よりも級長，委員長よりも生徒会役員など役割の大きな生徒や実行委員会経験回数の大きな生徒ほどその傾向が強くなることも明らかとなった。また，「○○活動は充実していましたか」に対する回答よりも，「○○活動を通して日々の学校生活が良くなりましたか」が低い値を示していることから，一つの活動で学校生活すべてを説明するものではなく，学校生活の一つとして特別活動の各活動内容が位置づけられていることが示唆される。

3.3.「主体性」と「充実度」に関する項目間の相関の様子

次に，調査項目における「主体性」と「充実度」の関係性についてそれぞれの項目間の相関について分析した。表4に各項目間における相関の様子を示す。充実度に関する項目は学級活動，生徒会活動，学校行事に共通した項目を挙げている。この様子を見ると，すべての項目間において，中程度の正の相関（1％水準で有意差あり）が見られた。また相関の様子からは，活動内容ごとに大きな差は見られず，「各活動は充実していましたか」と「日々の学校生活が良くなりましたか」にも大きな違いは見られなかった。以上のことから，主体性について高い自己評価をする生徒は中程度の相関で充実度にも高い自己評価をする傾向があることがわかった。

3.4. 因子分析を用いた各活動の振り返り自己評価の構造の違いに関する分析

続いて活動内容ごとに各調査項目を用いて因子分析を行い，これらの項目間の構造を分析した。因子分析においては，因子抽出法は最尤法（プロマックス回転）を用いた。表5は因子分析によるパターン行列を示したものである。表5から見出されることは，それぞれの活動内容によって，生徒が振り返りを行う際の視点が異なっているということである。まず，各活動内容の第一因子をみると，【学級活動】では「充実度」因子,【生徒会活動】では「主体的な協働性」因子,【学校行事】では「主体性」因子となっており，すべて異なっている。これまで述べてきたように主体性と充実度には一定の相関や影響があることは明らかだが, 生徒の振り返りとして，学級活動ではいかに学級で充実できたかを重視し，逆に学校行事では活動への積極的な参加やそこでの活動の姿勢を重視しているのではないかと考えられる。この学校行事の様子は，結果よりも過程を重視する特別活動の特性の一つとも捉えられるのではないかと考える。

次に，【生徒会活動】は他の活動内容と様相が異なる一面がある。第一因子では，主体性や充実度として位置づけていた項目に加えて，「自分の役割を，責任をもって果たすことができましたか」が最も高い値を示している。生徒会活動が，学校行事の実行委員会とは異なるように，学校生活を良くするための組織として位置づけられていること，その活動に自分自身が何らかの形で参画することが求められていることを

表4　各項目間の相関係数

相関係数			充実度		
			各活動は充実していましたか。	各活動を(やりがいをもって)楽しむことができましたか。	各活動を通して，日々の学校生活が良くなりましたか。
主体性	学級活動	1　学級での係活動などの仕事を，自ら進んで行うことができましたか。	.41**	.45**	.40**
		5　より良い学級にするために，活動内容を工夫したり，呼びかけたりできましたか。	.37**	.42**	.39**
		6　学級での活動に，学級(友だちなど）の意見を取り入れるように努力しましたか。	.45**	.48**	.44**
	生徒会活動	4　委員会の活動に，自分から進んで参加できましたか。	.38**	.50**	.41**
		5　委員会の活動に，学級(友だちなど）の意見を取り入れるように努力しましたか。	.31**	.41**	.43**
	学校行事	1　各学校行事に，自分から進んで参加できましたか。	.49**	.53**	.46**
		2　各学校行事に向けての準備活動（話し合い・作業等）に，積極的に参加できましたか。	.49**	.52**	.45**
		3　各学校行事をより良くするために，活動内容を工夫したり，呼びかけたりできましたか。	.41**	.45**	.43**

（注）**＝1％水準で有意差あり

表5　振り返り自己評価に関する因子分析（パターン行列）

学級活動	因子 1	因子 2	因子 3
7 学級活動は充実していましたか。	0.826	0.012	−0.015
8 学級活動を（やりがいをもって）楽しむことができましたか。	0.785	0.046	0.046
9 学級活動を通して，日々の学校生活が良くなりましたか。	0.723	0.044	0.038
3 学級での活動時など,自分勝手な行動をとらずみんなと協力して活動することができましたか。	0.031	0.791	−0.030
4 学級でのきまり（ルール）を，守れましたか。	0.012	0.703	0.022
2 当番（給食・清掃・日直）の仕事を，責任をもって果たすことができましたか。	0.074	0.565	0.061
5 より良い学級にするために，活動内容を工夫したり，呼びかけたりできましたか。	−0.021	−0.040	0.905
6 学級での活動に，学級（友だちなど）の意見を取り入れるように努力しましたか。	0.197	0.158	0.439
1 学級での係活動などの仕事を，自ら進んで行うことができましたか。	0.124	0.300	0.330
因子間相関	因子1	因子2	因子3
因子1		0.628	0.563
因子2			0.532

第一因子：「充実度」因子
第二因子：「協調性」因子
第三因子：「主体性」因子

生徒会活動	因子 1	因子 2
3 委員会で　自分の役割を，責任をもって果たすことができましたか。	0.688	0.032
4 委員会の活動に，自分から進んで参加できましたか。	0.679	0.072
2 委員会活動を（やりがいをもって）楽しむことができましたか。	0.444	0.347
5 委員会の活動に，学級（友だちなど）の意見を取り入れるように努力しましたか。	0.339	0.330
1 委員会活動は充実していましたか。	0.332	0.300
8 委員会活動はみんなのためになった（貢献できた）と思いますか。	0.289	0.492
6 所属する学級での委員会活動は充実しましたか。	0.258	0.516
7 委員会活動を通して学校生活が良くなりましたか。	−0.043	0.807
因子間相関	因子1	因子2
因子1		0.678

第一因子：「主体的な協働性」因子
第二因子：「全体における充実度」因子

学校行事	因子 1	因子 2
2 各学校行事に向けての準備活動（話し合い・作業等）に, 積極的に参加できましたか。	0.841	0.023
3 各学校行事をより良くするために, 活動内容を工夫したり, 呼びかけたりできましたか。	0.750	0.005
1 各学校行事に，自分から進んで参加できましたか。	0.696	0.131
4 各学校行事で，自分の役割を，責任をもって果たすことができましたか。	0.503	0.307
5 各学校行事は充実していましたか。	0.021	0.819
6 各学校行事を（やりがいをもって）楽しむことができましたか。	0.088	0.792
7 各学校行事を通して，学校生活が良くなりましたか。	0.074	0.693
因子間相関	因子 1	因子 2
因子 1		0.649

第一因子：「主体性」因子
第二因子：「充実度」因子

暗に示唆していると考えられないだろうか。委員会への立候補など，自らが選択し役割を担うのだが，同時に大きな組織の一部としての責任感も伴うことを感じているように考えられる。また, 第二因子は【学級活動】【学校行事】の「充実度」因子とは異なった構成をしており，生徒会活動を通しての充実度に関する項目で構成されている。こちらも，第一因子と同様に，生徒会活動そのものを良くするものではなく，生徒会活動を通して学校生活をより良くするものであることを生徒自身が感じている結果ではないかと推察する。

4. おわりに

特別活動の自己評価による振り返りアンケート結果から生徒の主体性と活動の充実度についての関連性を調査した結果，以下の知見を導くことができた。

まず，【学級活動】【生徒会活動】【学校行事】いずれの活動内容においても生徒の主体性がそれぞれの活動の充実度に対して影響を及ぼし，中程度以上の相関をもつことが明らかとなった。特に，学級役員や生徒会役員・委員長，学校行事の実行委員会など立候補して役割を担っている生徒ほど，役割のない生徒に比べその影響が大きくなっている。昨今の働き方改革による学校行事の削減などには生徒への負担軽減も指摘されることがあるが，それぞれの活動に対し，自らがその活動に何らかの役割をもって参画することでその充実度が向上されるのであるならば，それは生徒にとってもはや夢中になれることへの充実感であり, 負担感とは言えないだろう。確かに生徒の中にはこうした活動に負担感を抱く者も少なくはない。我々大人が細心の注意を払うべきは，活動の中で辛

い，苦しいと感じさせている“負担感”と，活動を無制限に行わせるために起きる心身の活動限界による“負担”である。しかし，この両者ではない，教職員の一方的な印象による活動の制限や制約は，生徒が自ら考えて行動する時間や場を大きく削減されるため，形式的・画一的な活動に陥りやすい。すなわち，生徒の主体性を著しく損ない，同時に充実度にも大きな影響を及ぼす可能性が極めて高いといえよう。

次に，特別活動の【学級活動】【生徒会活動】【学校行事】は，いずれもその主体性と充実度が影響し合っている中でもそれぞれ異なった特性を持っている可能性が示唆されたことである。【学級活動】では学級の充実度を振り返りの視点として重視しているのに対し，【生徒会活動】では生徒会という学校規模での組織の役割を担う責任感を包括した主体性が重視され，【学校行事】ではA中学校の実行委員会制度をいかした主体性が重視されている。この視点は，それぞれの内容の特性に適した視点となっている。類似した項目による自己評価だが，こうして分析することによって生徒がどのような視点で活動を振り返っているかを知り，これらの活動を実施する教職員のねらいや教育観と照合させることで，より適切な教育活動が推進できるだろう。

これらはあくまで長期間特別活動を推進してきた，特別活動先進校の一事例としての結果である。しかし，特別活動の各活動内容の特性を教職員が正しく理解し，継続的に生徒の主体性を育んでいくことで，このような充実した各活動および学校生活を生徒自身の手で創造していくことができることへの示唆に他ならない。学校生活がより良い，充実した学校生活になるために，生徒自身の手に学校生活を委ねる”主体性“を保障すべきである。今回，明らかとなった生徒の主体性と充実度の関係性をいかした生徒理解・教育活動の開発や，教科・領域を超えたクロスカリキュラムの構築など，こうした課題に向き合っていきたい。

謝　辞

本研究にご協力いただきましたA中学校特別活動指導部の皆さま，生徒の皆さんに心より御礼申し上げます。

引用文献

1）河村茂雄『学級づくりのためのQ-U入門』図書文化社，2006年
2）伊藤武樹，葛西敦子，小倉尚子，伊藤菜緒「小学校児童における「生きる力」と学校生活満足度についての因果関係」『弘前大学教育学部紀要』第93号 2005年，pp. 65–76
3）樽木靖夫，蘭千壽「中学校での行事活動における成就感に関する研究―体育祭と文化祭に焦点をあてて―」『日本特別活動学会紀要』第24巻 2016年，pp. 31–39
4）髙栁麻里「小グループを活かし，一人一人が主体性をもって参加することを目指した話合い活動―小学校5年生学級活動「おしゃべりのりのり会議」を中心とした実践から―」『上越教育大学学校教育実践研究センター教育実践研究』第24集 2014年，pp. 217–222
5）大林正史，近藤千恵子「サービス・ラーニングによる生徒の主体性と社会的有効性意識の向上―中学校の生徒会と住民による避難所生活の課題解決を通して―」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』第36号 2022年，pp. 99–109
6）長谷川誠「運動部活動を通じた人間関係形成能力の育成特別活動との共通性，差異性の観点からの検討」『佛教大学教育学部学会紀要』第20号 2021年，pp. 135–147
7）村瀬悟「中学校の生徒会活動を中心とした異年齢交流についての実践報告」『椙山女学園大学教育学部紀要』第14号 2021年，pp. 229–242
8）村瀬悟「生徒会活動による実行委員会を中心とした中学校の学校行事の取組についての実践報告」『椙山女学園大学教育学部紀要』第13号 2020年，pp. 331–342